
ティマー・オブ・ビースト (tamer of beast) 大地とそら

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティマー・オブ・ビースト (tamer of beast)

大地とそら

【ISBN】

N5089C

【あらすじ】

汝が文言唱えれば、瞬時に絵の中の虎現れて、汝の敵を噛み碎く
癒木大地、三十五歳、爵、しがないサラリーマン 東洋呪術
系ハードボイルド小説。

【作者名】

永良隆樹

プロローグ 決壊寸前の男

『ティマー・オブ・ビースト (Tamer of beast)』
大地とそら

猛獸使い (t am a e r o f b e a s t)

プロローグ

今、この瞬間。物語は始まる。
今よりほんの少しも遅れることはなく、ほんの少しも早まる」と
はなく。

時代は現代。

しかし、そもそもの始まりは数年前。

悪魔と神石があり、呪術師が神石を以つて悪魔を封じた。
そして時の流れること数千年、今よりわずか三十年前。開発によ
り神石は碎かれ工場へと運ばれた。再び人の世に悪魔は現れる。だ
が、長い年月によりその力は弱まっていた。

こうして悪魔は闇に身を潜め、力を取り戻すことに専念する。
一方の神石は碎かれ硅砂となつて工場へ運ばれ、一個のサングラ
スとなる。

そのサングラスを手にした田舎絵師の鉄蔵は、悪魔のこの世に蘇
つたことを知り、魂魄込めて一枚の絵を描く。

一枚は虎。一枚は龍。

そして時は流れ今に到る。悪魔は完全に力を取り戻し、一枚の絵
は一軒の家に埋もれたまま。

決壊寸前の男

「」は九州の北東の果てにある七倉市。日本有数の犯罪都市である。七倉市がどの程度犯罪都市であるかと言えば、七倉地方裁判所は支部でありながら本庁並みの規模を誇っている。つまり裁ききれないとほど悪人が多いのだ。

その七倉市の一箇の地場中小企業の菓子工場の事務所、ここに悪人とは程遠い男がいる。男の名は癒木大地、三十五歳である。三十五歳でありながらサラリーマン一年生である。どうしてそんな怪異が起こりえるのか。事の次第は簡単である。

彼は大学休学中に、一人のガラス工芸家のもとへ弟子入りした。以来十数年間、彼はガラス工芸の世界で飯を食つてきたのであるが、その途中で妻を得た。で、大抵の妻といつものは夫を意のままにしようとするものだが、彼女も例外なくそうだった。結婚四年目、彼女は彼に言ったのだ。職人をやめてサラリーマンになつてくれと。冗談じゃないと彼もはじめは言つた。だが、しつこかつた。どうしてここまでしつこくなれるのかと閉口するくらい。説得は一年にも及び、やがて口を開けばその話題ばかり。彼女にしてみれば夫がサラリーマンになつてくれれば利点が多い。当時彼は観光施設の工房で働いていたから土日は勿論、祭日もなかつた。しかも突発の釜焚きなどが入れば、朝は四時起きで家を出る。帰りは十一時に釜の火を止めて帰るから午前様だ。そんな生活から脱却して夫が土日休みで毎日決まつた時間に帰つてくれば、自分も働いている彼女からしてみれば助かることが多い。彼女は、仕事はできるが家事や育児がサッパリなのだった。で、終いには当時三歳の娘を引き合いに出して娘のためにもサラリーマンになるよう要請した。そう攻められると彼も弱い。目の中に入れてもレベルで娘が可愛い。で、最終的には開き直つて了承したのであるが、ある程度確信していた。こんな履歴書の人間を採用する会社はない筈だ、と。が、変な会社というものはあるものである。

それが、今彼がいる、怪鳥のよつた声で工場長がわめき散らす七倉製菓だった。

彼の仕事は営業管理である。

工場長の奇声飛ぶなか、日本全国の問屋から上がってきた伝票に目を走らせている。電卓を叩く。チェックした伝票をパソコンに入力していく。

サラリーマン一年生の彼に与えられた仕事は、全国の値引きチック。過剰値引きをチェックする仕事だ。菓子屋の取引は通常非常に複雑なリベート計算を以って行われる。リベートとはつまり、それが問屋の利益分だが、幾重にも重ね、どのリベートがどの商品にかかっているのかが非常に分かり辛い仕組みになっている。せりにセンターフイなどの経費が数%かかる。

彼の仕事は、それらを全部引いて、卸値が六十円を切る商品を見つけることだ。

が、今のご時世、百円定価の商品の卸値が、センターフイもろもろの諸経費引いて六十円以上におさまる筈がない。

当然、毎月ものすごい量の過剰値引きが発生する。彼はその全てをパソコンに入力し、担当営業にファックスと電話で回収を指示する。

が、それが徒労であることを知っている。入社半年ほどでだいたい解った。これら過剰値引きの大半は、自社営業が了承した取引だと。で、こういう風に細工して上げてくれと偽装した伝票である。つまり彼がそれを見破り自社営業に通達したところで、よりいつそう手の込んだ細工を施して上げてくるだけである。

彼はそれでも良いとおもっていた。片つ端から見破れば、表面に現れない形で沈静化するのみである。表面さえ奇麗であれば、彼は責任を問われない。

しかし、当然それで済むわけがないのである。かみなりおやじ工場長は、一件の過剰値引きも許さず、もし発覚したのなら全額回収を命じるのみなのだ。

つまり彼は非常に脆くて薄いダムのようなものだ。彼が決壊したら地上は大波に覆われ、工場長の怒りの嵐吹き狂い、全営業が給与カットされる。

別に庇つてやる義理もないのだが、自分のせいで人の給与が減らされるのは気分が悪いので頑張っている。（会社のために頑張っているのか、口クデナシぞろいの営業のために頑張っているのか、どちらとも言えないが。要は、工場長が世間一般並みの営業感覚を身につければせずとも済む仕事であるがそれは不可能に近い）

で、当然これらのこととは彼の健康にも悪影響を及ぼしている。

考えてもみて欲しい。当たり前のことなのだ。一年前まではおい「ラジン畜生の世界で室温六十 のなかTシャツ一枚で千三百 の釜と格闘してきたのだ。そこで将来有望な職人と目されていたのだ。それが、まったくのど素人扱い、首にネクタイ巻いてスーツを着て電卓叩いている。

今では心療内科に一週に一回通い安定剤と睡眠薬を貰っている。カウンセリングもしてもらう。それでなんとか己を保っている。彼というダムは決壊寸前である。

付け加えれば、そこまでの犠牲を強いて護るはずだつた妻子とは現在別居中である。転職以来、妻との関係は悪化してしまっている。もう一つ付け加えれば、この男こそが、後に七倉市のみならず日本全国を震撼させる連續殺人犯『猛獸使い（tamer of beasts）』その人であった。

七倉製菓新社屋

『なんだよコレ？　まいっただなあ。こんなのがりか？』

癒木大地は頭の中で唸つた。隣の席には足を机の上に投げ出して工場長がふんぞり返つてゐる。口には出せない。

彼の手には一枚の伝票がある。その伝票。一枚ずつ見ればどちらも普通の値引き伝票だ。だが、その一枚の伝票は同一の出荷にかかるといるので、いわゆる一重伝票である。問屋がよくやる手だ。彼は確認のためもう一度電卓を叩く。

一枚は十円引き。その問屋の基本リベートに各種協賛も含めて引いて、卸値は六十一円になる。ここまではオーケーだ。

ところが、もう一枚、「マート、創業祭協賛二千円」とある。

普通この形で伝票を上げられたら特定できない。お手上げである。が、今回は話が違つ。マートへの出荷は過去三ヶ月間に一回しかなかつたからだ。出荷ケース数が一枚目の伝票と一致する。

すなわち、十円引きした上、さらに協賛三千円を引いたことになる。これを出荷個数で割ると、最終的な納品価格は一個あたり四十円。

『四十五円だとお！？』癒木大地は再び頭の中で唸つた。過剰値引きをチェックしていくあまり見かけない数字だ。

とにかく電話だ。

該当の問屋、海星屋平尾支店担当営業は山崎だ。

「本社の癒木ですが、今お話大丈夫ですか」

「はいはい、なんでしょう」と相手は応じるが、値引き担当の彼からの電話内容は聞く前から想像がつく。声に警戒心がにじみ出ている

る。

「先月あがつてきた　マートへの協賛の伝票ですが……」と、一枚の伝票について説明をした。

「コレが　マートへの直送分でなく、問屋納品分にかかっているのなら問題はないのですが……」そんな可能性は極めて低いのだが、相手に逃げ道を用意する。

「調べてもらえますか」調査の結果、問屋納品分でした、と来ればこの問題は一件落着する。どうせ返つてこない金なのだ。彼としては、ここまでチェックしているのだと問屋に誇示して、今後一度とこんな姑息な手を用いないよう威嚇できればそれでよい。だが、隣りでふんぞり返つている工場長はそれでよいはずがない。自然電話の声は小声となる。

「(1)自宅のほうに伝票のコピーと出荷データをファックスしておきますので、見ておいて下さい」

相手は了承し、大地は電話を置いた。机を立つと問題の伝票を一枚並べてコピーし、そのコピーした紙を営業の自宅へファックスした。

机に戻り自分で作成した工クセルの表に一枚の伝票を加え、『調査中』と打ち込んだ。

さて。この一枚に大幅に時間を割いている場合ではない。こんな伝票が何百枚と彼を待つているのだ。

彼は再び伝票の山へと向き合つた。

こんな感じでいつも気付かないうちに定時となる。総務の女性が全員のタイムカードを力チヤンカチヤンと押していく。これはもうずっと以前からのこの社の風習らしい。

仕事の済んだ者から、一人一人と帰つていく。

やがて残つているのは、癒木大地のいる営業管理の島だけとなる。それでも課長が帰り、他の課員も帰り、残つているのは大地と資材担当の中田だけとなつた。

その中田が口を開いた。

「どうですか？ 癒木サン。 終わりそうですか」「大地は苦笑いを浮かべる。

「いやあ。到底。……でもこの時間帯のほうがはかどりますよ。営業時間中は電話とらないといけないでしょ。あれで結構中断させられるから」 営業連絡や受注や商品の遅延クレームなどの電話がジヤンジヤンかかるてくる。

「そうですね。どうせ残業代つかないんだから、のんびりやりましょーや」 そう言って中田は笑った。

中田の仕事は資材担当だ。コピー機のインク購入から新社屋建設までが彼の仕事だ。今、彼らがいる新社屋建設の時は、毎日午前三時まで残業していたようだ。

「（）の会社つて事務分担目茶目茶だよね」 大地の言葉に中田も笑つた。

「永富なんてパソコンいじるだけで何の仕事をしてるのって感じですよ」

永富というのは生意気な若僧で、大地の前任者だ。つまり値引きチエックの仕事はその生意気な小僧から引き継いだ。

「癒木サン、怒らないで聞いてくださいね。あいつ、癒木サンは工場長の犬だつて営業にメール送つたらしいですよ」
さすがに大地も呆れたが、想像の範囲内だ。

「いいよ。あいつのやりそなことだから。しかしうちの営業も馬鹿だね。俺が値引き担当になつてから減俸された営業が一人でもいるのか、そこんとこ考えたら誰が工場長の犬かわかりそなモンだけどね」

「ホントっすね」 中田は笑つた。現に永富が担当だつた時数人の営業が減俸された。しかも、永富と仲の悪い人間ばかり。

「分かつてないっすよ。みんな」 中田の口ぐせだ。

中田が大きくため息をつき、大地もつられてため息をついた。

「金曜の夜に残業して……」

「ホントに」

「来週あたり行きますか。ぱあつと気晴らしにお茶飲みに」
キヤバクラのことだ。二人はよく残業中に抜け出して、キヤバクラでウーロン茶飲んで再び帰社して仕事したりしていた。仕事中だからビールは飲まないのだ。

「そうですねえ。行きましょう」大地がそういう店へ行く時は大抵中田が一緒だ。

「俺、誰指名しようかな……。癒木サンは良いつすね。ゆりあサンいるから。あんなに奇麗な大人の女性普通七倉あたりにやいませんよ」

「良いって言われても別に俺の女ってわけじゃないし……。指名すれば隣に座ってくれるだけなんだから」と大地は苦笑する。彼が指名する女の子はいつも決まっている。二十九歳のゆりあサン。何度か行くうちに自然とそうなった。十八の女の子と会話するよりはよっぽど良い。

「ともあれ仕事仕事。今日中にコレ片付けないと」

「俺も。来週には先月分の伝票が上がってくる」

彼の仕事は一ヶ月ためるとアウトである。出社拒否になるしかない。自分で綿密に計画を立てスケジュール管理していくかないと伝票の山に埋もれて破綻することになる。

そんな感じで仕事を片付け家に帰ると十一時過ぎだつた。妻と四歳の娘は分譲マンションに住み、彼は実家の二階に居候している。テーブルの上にひとり分の夕食があつた。

白い皿の上に、トマトときゅうりのスライス、ポテトサラダ、ちくわ、鯖の味噌煮などが並んでいる。どう味わえと言つんだ? 洋風に盛れば良いというものではない。彼の母親は極端にセンスがない。カレーに太刀魚の煮付けなどという組み合わせを平氣でやる。彼は、カレーは好きである。太刀魚も好きだ。だが同時に味わうものではないと思っているし、ほとんどの日本人がそうであると思っている。余計な加筆かもしれないが、インド人だってそう思うに違いない。

しかし文句を言つても仕方がない。茶碗にご飯を盛りひとりで食べ始める。

作る人間の衛生観念が信用できない場合、どんなにおいしい料理であつても不味くなる。彼の母親の食器の洗い方は全然信用できない。ちやつちやつと洗う。そう書くといかにも手際よく洗っているようだが、ちやつちやつとしか洗わないのだ。マグカップの底に珈琲のシミが残っているし、口元も洗わないから口をつけたあとが残っている。注意して見ないと、箸の先になにかがこびりついていることもある。先田じい飯をよそおうとしてしゃもじがなかつたので、しゃもじをくれと言つと、流し台の洗い桶に浸かっていたのを、水で軽く流して渡してよこした。これには閉口した。そんな雑菌だらけの水に浸かっていた物を、石鹼つけて洗つたならともかく、水で流しただけのものでご飯をつげとは不衛生極まりない。文句を言つと水で洗つたけん大丈夫ぢやとの返答。らちがあかない。

ひとりで食事をしていると、その母親が顔を出した。

「の母親の話すことを余話文のまま書けば、統合失調症患者の独白のようになるので要点だけ書く。

明日、祖父の家へ片付けに行つてくれと言つ。要は祖父の家が区画整理に引っかかり立ち退きとなるのだが、めぼしいものがないか、あれば持つて帰つてきてくれとのことだ。

彼は了承し、食器を片付け一階へと上がつた。

パソコンを立ち上げ、いつもやつていてるオンラインゲームを起動する。ダウンロードに少し時間がかかる。寝転んで待つていつかにいつの間にか眠つてしまつていた。疲れ果てていた。

祖父の家

七倉市を南下し、北九州空港のある苅田町を横断し、行橋市に入り今川に突き当たる。その今川をずっと上流に上ったところが祖父の家だ。

祖父の家に行くのは二十年ぶりである。彼が十三のとき祖父は死に、十五の時に祖母も死んだ。その葬式以来だ。以降家はずっと空き家。二十年前と変わらぬ川面に少しばかり感動を覚えながら車を転がす。今の時期は菜の花が奇麗だ。土手に群生している。

彼の車はジムニーJA11。クロカンの軽自動車。すこぶる乗り心地が悪い。路面をポンポン跳ねながら走っていく。どんな小さな凹凸でも見事に拾う。

この車も、結婚以来の、ヨメさんとの確執のひとつだ。彼女はこの車が気に入らなかつた。乗り心地悪いし乗り降りし辛いし狭いから。だから違う車に買い換えるようしつこく言つた。妊娠中は流産すると言い、生まれたら新生児の首の骨が折れる、と言つた。が、彼は頑として首を縦にふらなかつた。ギターを押入れに入れることには同意した。マウンテンバイクを売ることにも同意した。が、この車だけは頑として譲らず乗り続けた。もう十年以上の付き合いだ。ヨメさんよりよっぽど良い相棒。コツコツへそくりして手を加え、改造箇所多数。アフターパーツが多いのもジムニーの魅力だ。

ハンドルを切り大きな橋を渡り、田園風景のなかへ車を乗り込む。行く手に大きな集落が見える。その中のひとつが祖父の家だ。

祖父の家は小さい。薪で焚く風呂だつた。絵描きだつたとは言え絵を描いて生計を立てていたわけではない。仕事もせず絵を描いていたから絵描きだつたのだ。夜行列車で銀座に飲みに行くような人間だつた。放蕩と道楽で田畠も山も食いつぶした。そんな祖父だが

子供の頃の大地にとつてはヒーローだった。自分も絵描きになると幼い心に思つたものだ。

小さな庭先に車を乗り入れる。いつ建つたのか、隣りに大きな家ができるいてちょっと驚く。その垣根の向こうに少女が一人いてこちらを不審そうに見ている。

高校生くらいだろうか。大きな瞳とその目じりのほくろが印象的大地を見て家のなかに向かつて何か言った。

ちょっとと氣まずい思いで車を降りた。家のなかから祖母らしき人が顔を覗かした。大地は軽く会釈した。祖母らしき人は大地の顔に幼い頃の面影を見たようだ。孫娘に怪しい人間ではないと説明している様子。

彼はもう一度会釈すると背を向け玄関に向かつた。

鍵穴がさび付いている。数十年の時を待つていたドアノブ。鍵を差し込むとカタンというという音を響かせ開いた。静かにドアを開ける。二十年分蓄積していた空気がどんどんと流れ出してきた。

埃っぽい。玄関口にたたずんでしばらくなかの様子を見た。狭い家だ。一目で見て取れる。どの部屋も柱も懐かしい。記憶にある。ただしうつと小さい印象だ。驚く。こんなに狭かつたつけ。

靴を脱いであがりかけ、思いどまり足を戻す。床に埃が積もっているのだ。スリッパを持つてくるのだった。後悔したが遅い。彼は家の奥に向かつて手を合わせた。

お爺ちゃんお婆ちゃん「ゴメンナサイ。そう心のなかで呴くと土足で上がつた。

さて。手つ取り早く済ましたい。部屋は三間。茶の間に畳みの部屋がふたつ。搜索場所はふたつの箪笥に押入れといったところだろうか。葬式の時の形見分けでほとんど何も残っていないはずだ。

とりあえず窓を全部開けた。心地よい空気が入ってくる。二十余年よどんでいた空気が新鮮な風に吹かれ何処かへ消えてゆく。

さて。

パンパンと手を叩いて押入れを開けた。

なかにはクルクルと巻かれた日本画が山ほど入っていた。彼は懐かしい気持ちでいっぱいになりながら、それらの絵を一枚一枚見ていった。虎、牛、馬、動物や龍を描いたものが多くた。仏画も沢山あつた。観音像や達磨。どれも子供の頃、祖父が描いているのを脇から息をつめ見ていた。独特の筆の線、色彩、構図。彼の美意識の根底を形成している。

見た憶えのない物もあつた。春画の類。こんなものも描いていたのか。確かに子供には見せられない。ひょっとしたら生計の足になつていたのかも知れない。

多少問題はあるが絵は全部持ち帰ることにする。いつたん車に戻り段ボール箱を持ち出し、そのなかに絵を全部入れた。

次は箪笥。少しわくわくしながら覗いてみたが、こちらは押入れとはうつて変わり、めぼしい物は何もない。古銭を何枚か見つけた。明治、大正の頃の硬貨。

最後に開けた引き出しに木箱があつた。鍵がかかっている。
なんだろう、これ？

彼は訝しがり取り出して見る。裏にガムテープが張つてある。ガムテープの中央が少し膨らんでいる。鍵はどこにあるのだろうか？ この部屋のどこかに。次の瞬間閃いてガムテープをはがした。思つたとおりそこには鍵があつた。

なるほど。

でも、ちょっと奇妙だ。

泥棒よけなら鍵を貼り付けておくのはおかしい。しかもこんな箱なら持ち出して壊せばいいのだから、鍵をかけるのなら箪笥の引き出しにかけるべきだ。家族（婆ちゃん）に見られるとまずいもの、と考えるのもおかしい。鍵を底へつけておくわけがない。

誰かに受け渡すモノ？ 後からここを家捜しする誰かに。例えば俺とかだ。

それは奇抜な発想だ。何の必要があつてそんな真似をする人間がいるのだ？ が、とにかく開けて中を見てみればわかる。

彼は鍵穴に鍵を差し込んだ。

少しだけキドキする。いつたいこのなかで何が誰を待っていたのか（これは比喩的な表現でその時思ったのだが、皮肉なことにその言葉どおりだと知ることとなる）。

なかには眼鏡ケースと小さな巾着袋がふたつあるだけだった。
ふむ……。

少し考え巾着袋のうちひとつを手に取った。なかから出てきたのは銀製で見事な彫刻が施された龍の指輪だつた。それは幾重にも指に巻きつくような形にデザインされ、細かい鱗まで奇麗に掘り込まれ、首をもたげ鬚をピンと伸ばし牙をむいている。

驚いた。

どうして爺の時代にこんなシルバーリングが！？ 爺がこの辺のあの時代の人間にしてはハイカラな人間だつたことは想像できる。かと言つて、こんな、現代でも通用するようなデザインの指輪を作らせていたとは。そう。だつて。これは完全にオーダーメイドだ。くろずみやくすみは経年変化か。磨けば今のシルバーアクセとはまったく違う銀の表情を取り戻すのかもしない。

魅入られたように左手薬指にはめてみた。ぴったりだつた。
もうひとつの中着を手に取る。

予想通り、こちらもリングだ。こちらの意匠は虎。龍に比べると全体に平坦な印象で、スタンプリングのよう。中央に丸く虎の顔があり牙をむいている。虎とわかるのは頬の掘り込みと額の王の字から。

右手薬指にはめてみる。「ちちもあつらえたようにぴったりだつた。

ますます謎が深まつた。銀の指輪。これにはいつたいどんな意味があるのだろう。爺ちゃんは何故これをこんな形で遺して逝つたのか（生前、こんな指輪をつけているのを見たことはない）。特注しまつたく身につけることもなくこんな形でしまいこんでいた意味は？ 眼鏡ケースを手に取る。開けてみると洒落たサングラスだつた。

オーソドックスな形だが今かけて歩いても全然不自然でないデザイン。

「これも良いかもしない。これも指輪同様もらいだ。見つけた俺のもので誰も文句はないだろ？」

かけてみて鏡を探した。その時だつた。

頭のなかにはつきりと明瞭にその声は響いた。

「やれやれ。やつとぬしと話せるのう」

心臓が止まるほど驚いた。驚きのあまり尻餅をついた。不意を突かれた猫のように周囲をきょろきょろと見回した。

再び声は響いた。

「これこれ。そんなに驚くでない」

驚くなだつて！！ 何だ！？ 誰もいないのにこの声は何処から聞こえてくるンだ！？ 僕は自律神経失調症も鬱病も飛び越して統合失調症になつたのか？？ それでつひに幻聴が聞こえるようになつたのか！？

「これこれ。幻聴ではないぞ。今ぬしがかけておるサングラス。それがわしじゃ」

彼はサングラスを宙に放り出し、ずざわざと埃だらけの畳の上をあとずさつた。あと少しで回転するほどの勢いだつた。そして緊張状態の猫のようにそのままの姿勢で様子をうかがつた。

一分待つた。実際にはどれだけ時間が経過したかわからない。声は聞こえない。

「大丈夫だ」自分で小さく呟いてみる。

「大丈夫だ」もう一度。少し大きな声で。

自分の声に勇気付けられた。ここには誰もいない。声もしない。

さつきのはいつたいなんだつたンだ？ 僕はホントに統合失調症になつたのかもしれないぞ。幻聴、幻覚、人によつては幻臭というのもあるらしい。俺は幻聴が聞こえたんだ。しかも凝つた幻聴で、眼鏡をかけると聞こえる、さも、眼鏡が話しかけていくように聞こえる、という幻聴だ。カウンセラーに相談しなきゃ。

その時だつた。

携帯のバイブ音が聞こえた。

はつと田をやると、埃だらけの畠の上で、サングラスが振動していた。

「つぎやあああ

悲鳴を上げて家を飛び出し車に飛び乗りエンジンをかけギアをバツクにいれエンストしもう一度試みてエンストしようやく庭から転がるように飛び出して一般道へ出て田につぱいアクセルを踏み込んだ。

車は今川土手まで走ると、そこでコーナーで猛スピードで戻ってきた。

畜生。俺には、俺が、どう考えても気が狂つたとは思えない。だとしたら、あのサングラスがホントに喋つているんだ。それが、爺ちゃんがアレを遺した理由だ。だつたら、聞いてやろうじやないか。聞いてはつきりさせようじやないか。このリングだつてそれなりの理由があるはずだ。

彼は再び車を庭に乗り入れると、敢然と玄関口に立つた。畠の上のサングラスはそのままだつた。意を決してのつしのつしと進みサングラスを手に取ると奥歯食いしばりながらかけた。

かけると同時に、

「やれやれ。戻つてきたようじやのあ。鉄蔵の孫にしては胆の小さい奴じや」サングラスは喋つた。

「お、お、お前は誰なんだ！？」奮起して聞き返した。

サングラスは答えた。

「わしか？ わしは神じや」

神様の声が聞こえるなんてやつぱり統合失調症じやねえのかあ……が、神様は続けた。

「古代には神石であつた。呪術師を助けオオオシガミを封印した。オオオシガミとは大悪神と書く（するとサングラスのなかに大悪神と文字が浮かび上がつた）。この国ではそう呼ばれておつたが西洋

ではアイ一と呼ばれる悪魔じや。ハボリュムという別名も持つ。人を扇動し殺人へと駆り立てる神じや」

人間、突拍子もない話を聞かされたほうが案外信じてしまうものである。眼鏡が喋るという前提を、彼は受け入れていた。さらに眼鏡の話す悪魔の話に興味さえ持ちはじめていた。

「太古のこの国でも人殺めが流行り呪術師がわしを以つてオオオシガミを封じ込めようやく民心は平穏を取り戻した。ところがじや」と、眼鏡はそこで口を切った。

「今を去ること三十余年前。開発によりわしは採掘され工場へ運ばれ硝砂となり融かされこんな姿となつた。オオオシガミ」とアイ一は蘇り人の世の闇に姿を消した。奴が力を取り戻すまで三十年。つまりじや。奴は完全に力を取り戻しておる。今、現在。どうじや、ここ数年獵奇的な殺人事件が頻発しておらぬか？ 七倉市近辺で言われてみれば確かに最近凶悪な事件が多い。もともと七倉は犯罪多かつたからさほど気にも留めてなかつたが。

「アイ一に汚染された人間どもの仕業じや。よいか。ぬしに解り易いように説明してやる。汚染レベル一〇で人間は常軌を逸した殺人を犯すようになる。止めることはできない。殺さない限り」

「アイ二つて奴を倒せば……？」

「倒せぬ。かつてのわしの力は失われた。さらにアイ一はわしに見つかぬよう結界を張つてある。何処にあるのかわからぬ。我らにできるのは汚染された人間を退治していくことだけじや」

今、我らつて言ったよな。我らつてお前と誰なんだ。

「わしと出会い悪魔が世に蘇つたことを知つたお前の祖父鉄蔵は、魂魄込めて一枚の絵を描いた。一枚は龍。お前の実家で客間の座敷の欄間に飾つてあるはずじや。もう一枚は虎、これも同じ部屋でついたてとなつておる」

確かにその絵は言われたとおりの場所にある。子供の頃から。

「なんで見てもいのにそんなこと知つていいんだ？」

「わしは神じや。この身は古びた筆筒のなかにありとても世界で起

「」の出来事の隅々まで知つておる

なるほどねえ……。もはやどんな懷疑的疑問も頭に浮かばない。

サングラスが喋つてているのは確かに、悪魔の話も本当そうだ。

「で、根本的な質問だけど、あんた今テレパシーで喋つてんの？」

サングラスは高笑いした。

「テレパシーなどとは幻想。つるじや。わしは眼鏡のつるを振動させ、お前の鼓膜に直接音を届けておる」

「なるほど。で、話を戻すけど爺ちゃんが絵を描いて、で、どうなつたんだ」

「そこだ。大地。心して聞け。鉄蔵の孫であるぬしにはあの一枚の絵の虎と龍を召喚することができる。虎と龍を以つて汚染された凶悪犯達を退治するのじゃ」

「何だつて！ 今、なんと言つた！？」

「俺がするのか！？」

「然様」

「冗談じやねえっ！ ……！」

「相手は凶悪犯だろおつ……！」

「然り。しかも汚染レベル十五を超えるれば妖怪化する者もいる。人間以上の力を持つ者も」

なあさら「冗談じやねえ。

「お前一人でやれ！」

「今のわしはこの姿じや。アイニを封じる」とも倒すこともできぬ。汚染された人間も然り

サングラスの言葉をさえきつてしまくしたてた。

「俺は仕事で忙しいンだ。知らねえだろうが、月曜には横川という問屋の伝票が上がつてくる。一ヶ月分の伝票が電話帳くらいの分厚さなんだ。しかもそのほとんど全てが不正伝票というひどい問屋なんだ。そんな問屋が全国に何十軒もあるンだ。とてもそんな……なんだ、悪党退治なんてやってる暇はない」

「仕事は手を抜くがよい。自分の担当問屋の管理もできないような

営業は工場長へ売り渡せ。ぬしは明日から時間のある限りパトロー
ルじや」

何故うちの会社の内情を知っている?

「パトロール? 何処をだ?」

「繁華街あるいは郊外の住宅地か。奴らが狩場としていそぐな場所じや」

繁華街に郊外の住宅地じや、そりやあ全部つてことじやねえか。
「新聞報道などから殺人鬼の性状を調べればぐつと絞られる」
待て。待て、何を具体的な話をしているんだ。そもそもこんな話ははじめからお断りだ。第一それじや、いくら相手が殺人鬼とは言え、俺が人殺しになるじやないか。

「断る!!」毅然として言つた。

「ぬしは既に指輪をはめたであろ?」

「え!? この指輪??

「それはもはやおぬしの指から外れぬ。それは召喚の助けとするため、鉄蔵が知り合いの彫金師に特別に作らせたもの。まずいちに、銀は魔を退ける。そして、虎と龍はぬしを守護する……」

神様の説明をまったく聞かず、大地は指輪を外そつと渾身の力を振り絞つた。が、まつたく外れない。

「とは言え、まだ、ぬしに龍は召喚できぬ。虎は召喚できるがの」
クソシタレ。

「召喚、召喚つて、虎が絵のなかから出でてくるのか!??」

「然様。ぬしが呪文詠唱すれば瞬時に現れ、ぬしの敵を噛み碎く」
それを聞いて、指輪を外そうとしていた手が止まつた。

「俺の敵? だつたら工場長とかも?」

「汚染されておらぬ人間は駄目じや。わしが許さぬ」
だあ、だつたらやつぱりいらねえ。

「ぬしの愛娘、そら」眼鏡が脅すように言つた。

「そらがガングロヤマンバギヤルになつてもよいのか」

「ど、どういう意味だ」

「わしは神じや。成そうとすればいかよつなことでも成せる」

「ふたつ疑問がある。まず第一に、どうしてお前がガングロヤマンバギヤルなんて単語を知っている?」

「わしは神じや。この身がどこにあらうとも、この世の隅々のことまで知つておる」

またそのセリフか。

「じゃあ、第一に、ガングロヤマンバギヤルなんて今どきどんな田舎に行つたつて歩いてねえぞ」

「じやから余計痛い子になるじやろつの」

「ぐう……。ぐうの音もでないとはこのことだ。これほどの驚天動地は人生ではじめて体験した。

「」、「断る……」断る声も弱々しい。

「無駄じや」神様は冷徹に伝えた。

「さて。そろそろ日暮れじや。荷物をまとめて帰るがよい。わしのことは常に肌身離さず持ち歩け。かけられる状況であれば常にかけていよ……」

神様の言葉を、大地は放心状態で聞いていた。付け加えれば錠剤（精神安定剤）を五錠口に放り込み水なしで飲み込んだ。が、気持ちが優れることはなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5089c/>

ティマー・オブ・ビースト (tamer of beast) 大地とそら
2010年10月9日01時15分発行